藤枝静男著作集　第三巻

藤枝静男著作集

藤枝静男著作集　第三巻

昭和五十一年十一月十二日第一刷発行

著者／藤枝静男
発行者／野間省一
発行所／株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話／東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京八―三九三〇
印刷所／信毎書籍印刷株式会社
製本所／大製株式会社

©藤枝静男　昭和五十一年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。Printed in Japan

定価は箱に表示してあります。（文1）

¥2,500

藤枝静男著作集　第三巻

目　次

〈小説〉

凶徒津田三蔵 13
「凶徒津田三蔵」のこと 113
愛国者たち 116
孫引き一つ——二人の愛国無関係者—— 170
大津事件手記——児島惟謙 177
キエフの海 180
老友 198
プラハの案内人 218
〈随筆I〉
ヨーロッパ寓目 233
あれもロシアこれもロシア 257

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ちょっと感じたこと 265
ヤスナヤ・ポリャーナへ 267
ウラジミールの壺 278
また接吻された 289
北欧の風物など 293
ガンジス河・ヒマラヤ 298
インド瞥見 301
インドの弥生壺 303
フランクフルトのルクレツィア 306
〈随筆Ⅱ〉
落第仲間 317
落第坊主 320
三度目の勝負 323

同級会 325
みんな同じ 327
日記 328
日曜小説家 332
隠居の弁 334
筆一本 339
廃業正月 341
隠居の弁 345
筆まかせ 348
原稿料についてのアンケート 353
遠望軽談 354
憎まれ口 359
虚子のレコード 362

旧街道 365
わが家の夕めし（写真にそえて） 368
髭を生やしたがすぐ剃った 369
ドック入り 371
〈随筆Ⅲ〉
果たし合い 377
洋服屋ほか 378
昭和五十年 381
歳末 383
晴着 385
家の外のこと 387
季節 392
養老 393

緑の光 395
道具屋の親爺 398
二人組強盗 400
泥棒三題 404
今朝の泥棒 411
感あり 415
食物のこと 416
金庫の始末 418
判彫り正月 421
趣味としての篆刻 424
宇布見山崎 427
異郷の友 429
田沢の自動車 431

解説　448
初出一覧　440

装幀　辻村益朗
口絵写真撮影　野上　透

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

藤枝静男著作集　第三巻

小

説

凶徒津田三蔵

明治六年三月、金沢から急行した三蔵等の討伐一番小隊が、二十日の午後福井に近づくにつれて見たものは、すでに捕縛されて役場や寺に押し込められている四百人余りの農民だけであった。

三月六日大野盆地に初発した門徒一揆は八日に終熄し、続いて十二日今立坂井の両郡に波及した騒動も、二日後の十四日にはもう鎮定されていた。

寺の高い廊下の賽銭箱の前には、疲れた二三人の邏卒が、長い警棒をかかえてぼんやりと立っていた。そして青竹を二三段横にうちつけて外と仕切られた暗い広い本堂の畳の上に、飢えと恐怖で衰弱した農民が、寝たり坐ったりして、山門から入って来る兵隊を不安気に眺めていた。

別の寺では、野袴に長刀をうち込んだ士族たちが、生き生きと用事あり気に境内を歩きまわり、兵隊の姿を見つけると笑いを浮べて駈け寄って来た。

三十前後の、骨格の逞しい赫ら顔の、釣り上ったような眼つきをした士族が居た。彼は竹鞭を振り振り軽快な動作で歩み寄って来ると、邏卒を制して小隊長に近づいて頭を下げた。

「長途お疲れのことでごじゃる。わしは旧福井藩の小田と申すが、いや埒もない烏合の衆で、忽ちあの始末じゃ」

ひと息に云って本堂の方を見て笑った。いかつい顔の奥に狡猾な表情があった。
「何かお書き留めになるようなことでもあれば、わしから詳しゅうお話し申す」
彼はせわしく喋りながら先きに立って庫裡に入って行った。
「畢竟ずるに、愚かな百姓どもが坊主に煽られて仕でかしたことで、他愛もない」
そもそも騒動のはじまりは官員石丸八郎の「懇説」を附近の坊主どもが誤解し檀徒を教唆したためであるということ、石丸なる男はもとこのあたりの唯宝寺という寺で良厳と名乗った住職であったのだが東本願寺の命を受けて長崎へ耶蘇教の取調べに下ったのち東京へ出て還俗し官途についた男だ、というようなことを小田はせかせかと説明し続けた。
「いや、かたじけないが、そういうことは後日敦賀から役目の者がまいった折りに」
隊長がうち切るように云って、庭に整列している兵の方を振り返って
「休息して置け」
と暗い庇の中に消えた。
叉銃の脚下に重い毛布を巻いた背嚢をおろすと、兵たちは庭井戸に走って行き、それから思い思いの場所に、本堂の階段や踏石の上に腰をおろした。
「仰山とらまえたものだの」三蔵と並んで山門の敷居に跨がった兵が「何を食わしとるか知らんが」
一人が「まず兵隊よりはましなものを食うとるじゃろう」と笑った。三蔵が
「いや、明日あたりはことごとく放免じゃとか、丸岡で耳にした」
と云うと、門扉に背をもたせかけて眼を閉じていた兵が
「わしも丸岡で聞いたが、大方は放されても十人ほどは敦賀に送られて斬罪じゃろうと。これは県

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com